

都市景観をめぐる認識の変容

——パリのモノキュメント論争から——

一 はじめに

都市は、その自然条件、歴史、社会状況によって固有の景観を持っている。十九世紀以降、情報や技術が世界的に共有されるようになり、時には同様の建造物や街路が建設されても、それぞれの都市が持つ特徴は受け継がれ、人々をひきつける魅力となっている。確かに、時代の変化のなかで、都市の空間構造は大きく変化することもある。にもかかわらず、より長いスパンでみたときには、それは都市の歴史の一部として吸収される。そのような都市景観の個性は、具体的な人間の営みと社会のいかなる関係によって実現するのだろうか。

新しい建造物が建設されるとき、あるいは以前あった建

荒 又 美 陽

造物が壊されるとき、それが都市の印象を変化させるものであればあるほど、市民の間に議論が起ころ。議論は新たな景観の評価を固定し、都市におけるその位置づけを決めていく。結果として、その変化は都市の一部に組み込まれるのである。筆者は、一九八〇年代にパリに建設されたルーヴル美術館のガラスのピラミッドが、論争を経て受容される過程を別稿で論じた(荒又二〇〇三)。本稿では、近代パリ景観形成史における同景観の特徴を検討する。

景観については、地理学、都市工学、建築学、社会学と多岐にわたる領域での研究業績がある。十九世紀末から第二次大戦後までは、それはおもに地理学の研究対象であった。英語の *landscape*、フランス語の *payage*、ドイツ語の *Landschaft* は、字義通りにはいずれも「土地のあり

よう」を意味する。地理学には、自然と人間の関係、言い換えれば地人相関論の系譜があり、景観は文明の足跡、あるいは社会の基盤の表れとして、特権的な研究課題であった。⁽¹⁾

その後の一時期は、「景観」は学術用語としては避けられていた。研究が進むにつれ、観察者の主観、また自然と人為的な変化の全てを含んでいることが曖昧だと考えられたのである。地表や空間を記述する際の対象として「地域」という用語が用いられるようになったのはそのためである。

シカゴ学派をはじめ、都市政策との関連で空間の利用を検討する研究が進んだ後、一九七〇年代から再び景観に関心が集まってくる。ゾーニングに代表される画一的な都市計画や空間の数量的な分析への批判を受けて、より人間的な概念として注目されたのである。まず、都市工学の分野では、都市計画に分析的な概念を用いるのではなく、景観の持つ総合性を活かすための研究が始まった(カレン1971、樋口一九七五)。個々の人間の認識において空間が要素に分解されているわけではないことが重視されたのである。地理学では、この概念の近代性に注目が集まっている。

ベルク(1986、一九九〇)は、自然と人間の近代的対立を作り出したのはまさにこの景観概念であるとして、これを持ち越えるべく考察をつづけている。またコスクローヴ(1984)は、景観概念の発現と資本主義の勃興が一致することに着目し、この関係を芸術作品と技術の進歩の統合的な視点から検討している。景観は、もはや自然と人間の関係を把握するための研究対象としてばかりではなく、近代社会の形成に大きく寄与した要素として捉えられているのである。

パリは、近代化のひとつのモデルとみなされてきたフランスの首都である。その景観形成は、必然的に近代特有の諸問題と絡み合っている。ここでいう景観形成とは、単に建造物が建設される過程を指すのではない。時代の変遷の中で、人々が都市景観に何をしようとするかは変化する。つまり都市景観形成とは、人々が景観に何を投影しているのか、その認識の推移を含んでいるのである。本稿は、パリの主要なモニュメントが建設された歴史をたどり、都市景観とそれに対する人々の認識が社会情勢と密接に連動しつつ変化する過程を示していく。

図一 ヴァンドーム広場の記念柱(筆者撮影)



二 権力誇示から革新的景観へ

パリの有名なモニュメントのうち、絶対王政期までに建設されたものは少ない。現在でも主要な観光地となっているものには、ノートルダム寺院、ルーヴル、アンヴァリッドなどがある。これらの巨大な建造物の目的は明瞭であり、誰が権力の中心にいるかを示すことである。教会や国王によって建てられた建造物は、権力を誇示するために壮麗で豪華なものである。建設に対する批判は、仮にあったとしても封じ込められていた。

しかし、フランス革命の後、特に十九世紀に入ってから、景観に大きな影響を及ぼす建造物が、何の批判も受けずに造営されることは少なくなった。誰が、どこに、何を作るかは、激しい論争や批判の対象となったのである。その状況をもっともよく表すのが、ナポレオンがヴァンドーム広場に建てた記念柱である(一八一〇年、図一)。ローマのコロンナ広場をまねて、ローマ皇帝の衣装を着たナポレオンを載せたこの柱は、ナポレオンが栄華を誇った時期に建造されたが、失脚と同時に引き倒された。さらにその後、七月王政の誕生とともに復元され、コミューンによって再

度倒され、第三共和政時に再度復元されて現在に至っている (cf. 杉本二〇〇二年)。

ナポレオンのモニュメントは、帝政の権力をはっきりと想起させるがゆえに、それを利用する立場と対抗する立場とによって格好のシンボルであった。破壊しやすい建造物であったことは確かだが、ひとつのモニュメントが、権力の帰趨によって建造と破壊を繰り返されたこと自体、景観の形成に革命以降の権力主体としての王と市民のせめぎあいを見ることができよう。

アギュロン (1996) は、革命に関連しない中立的なモニュメントを設置する意味について検討している。ナポレオンは、バスティーユ広場にゾウの噴水を作る計画を立て、実物大の模型を設置した。なぜこのような奇妙な物を選んだかといえば、バスティーユという革命を象徴する地に、共和政を想起させない像を置くことが重要だったからだというのである (p.879)。この計画は最終的には実現せず、一八四〇年に建てられた七月革命の記念柱によって、バスティーユは再び共和派の聖地となった。

コンコルド広場もその例である。これはルイ十五世が建設した広場であるが、革命時には王侯を処刑するためのキ

ロチンが置かれ、名称もルイ十五世広場から革命広場へと変えられた経緯があった。この広場に対する王党派と共和派による意味づけの取り合いは、どちらの陣営の記憶も喚起しないオペリスクを設置すること (図二) によって一八三六年中立化された (ibid, p.883)。⁽²⁾

このようなモニュメント争いの最後ともいえるのは、サクレ・クール寺院の建設である。一八七三年、モンマルトルというパリ・コミューンの主要な陣地に教会を建設することが決定された。普仏戦争、コミューンと続いた激しい戦闘の後、カトリシズムへの回帰という保守的な傾向が現れたのである。しかし、共和主義者から見れば、教会権力は革命が否定しようとしたもののひとつである。ハーヴェイ (1970) が描いたように、一八七五年に着工した教会は、建設中にも国民議会で計画の撤回が議論され、完成までに四十四年の歳月を必要とした。

第三共和政以降、王党派・共和派とも自己の陣営をはっきり示すモニュメントを積極的には設置しなくなった。世論を刺激するよりも、都市を整備することに重点が置かれたのである。都市の整備とは、道路や上下水道のようなインフラストラクチャーの建設だけではない。既存の建造物⁽³⁾

図二 コンコルド広場のオベリスク (筆者撮影)



を保存することもまた、都市整備の重要な目的と位置づけられたのである。一八九七年には、古きパリ委員会 (Com-mission du Vieux Paris) が発足し、どの建造物をどのように保存するか調査や意見交換が始まった。

こうした中、パリに新たなモニュメントを提供し続けたのは、万国博覧会であった。国内における権力争いは続いていたものの、むしろ国家としての力を示す景観形成を志向し始めたといってもよい。しかし、建設されたモニュメントがパリという都市において論争の対象とならなかったわけではない。今度は、その景観の革新自体が問題となったのである。

三 エッフェル塔をめぐる論争

万国博覧会は、十九世紀中盤から二十世紀初頭のパリに多くの革新的な景観を作り出した。グラン・パレ、プチ・パレ、シャイヨー宮など、博覧会が終了した後も取り壊されず、現在まで美術館や展覧会会場として使われている建造物が多い。それらの建造物は、パリが最先端の文化の発信地であることを内外に知らしめる役割を担っていた。

そのなかで、その革新性が最大の議論を呼び起こしたの

は、いうまでもなくエッフェル塔である。一八八九年万博の呼び物であったこの「三〇〇メートルの塔」が論争の的となったのは、「芸術家」である建築家ではなく「技術者」であるエッフェルの案が選ばれたからだという見解が一般的である。あるいは、この経緯を仔細に追った松浦（一九九五年）は、エッフェルの見解が帝国主義的であるのに対し、反対者はナショナルリステックであったと指摘している。つまり、イデオロギー的立場の違いが論争の背景にあるということである。

本稿は、塔の建築史的意義、論争の政治的背景ではなく、この時代に景観の革新自体が問題となったという事実に着目する。そこで、エッフェル塔に反対を示した宣言として有名な「芸術家たちの抗議文」とそれに対するエッフェルの反論から、論争の争点を検討することにした。両者とも現在の『ル・モンド』の前身である『ル・タン』紙に掲載されたものである。

「芸術家たちの抗議文」は、石で建設された現在のパリが世界に比類なきものであることを強調する。

「イタリア、ドイツ、フランドル地方は、それらの美学

的遺産を当然ながら非常に自慢しているが、われわれのものとは肩しうるものは何も持っていない。だから、パリは世界の隅々から興味と賞賛をひきつけている」

そして、そのパリを冒瀆するのがバベルの塔ともあだ名されるエッフェル塔なのである。

「商業主義のアメリカでさえもほしがらないようなエッフェル塔、それは疑いなく、パリの恥である。(……) 外国人は万博に来て、驚いて叫ぶだろう。何だ？ フランス人が、あんなに誉めそやされている彼らの美的感覚 (gout) を我々に理解させようとして思いついたのは、こんなひどいものかと」

ここでは、塔に反対するのは *gout* (美的感覚、趣味) の問題となっている。モニュメントをめぐる賛成、反対を分けるのは、政治ではなく景観自体に対する感性だと明言しているのである。⁽⁵⁾ さらに特徴的なのは、パリが諸外国の人々の目にどのように映るかという論点である。確かに、万博のための建造物であるからには不可欠の視点ともいえ

る。しかし、新たな景観を批判する基点がフランスではなく、世界的な価値観におかれていることは、技術の進歩と情報によって世界が急速に狭くなるなかでヨーロッパ各国がその頂点を争っていた状況を表している。塔は、世界中の人々にフランスの美的感覚を提示するものであるがゆえに批判の対象となっているのである。

これに対するエッフェルの反論は、技術者も美に配慮しないわけではないという主張から始まり、次のように展開する。

「大規模なものにはある種の魅力や固有の美しさがあり、それには通常の芸術理論はほとんど適用できない。人は、ピラミッドについてなら、人々の想像力をあれほど刺激したのはその芸術的価値であると主張するだろう。(……) エジプトでは感嘆すべきものが、なぜパリでは醜悪でばかばかしいものになるのだろうか?」

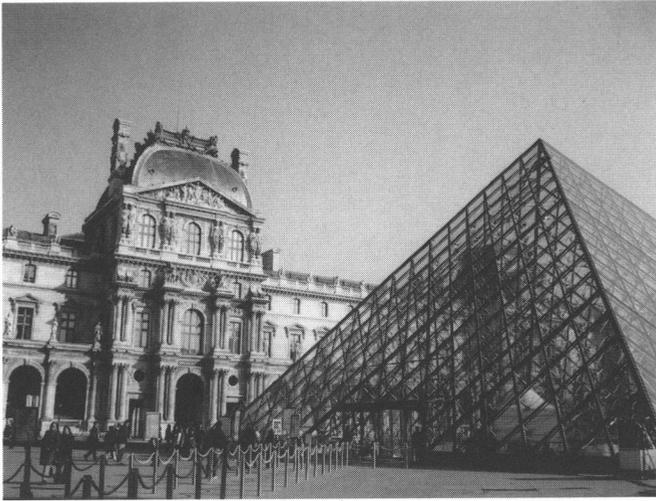
エッフェルは、塔が巨大であるがゆえに人を感動させると主張する。その際、彼はエジプトのピラミッドを引用する。ナポレオンの遠征以降、フランスでは古代エジプト文

明の研究が隆盛となった。ピラミッドの存在は当時すでに人口に膾炙していたのだろう。それは古代文明によって建設され、時代を超越して存在する大建築の象徴である。エッフェル塔は、当時世界最高の高さを持つ建造物となるものであった。つまり、ピラミッドとも比しうる大建築をつくる技術力が、現代フランスを世界に提示するというのが彼の主張なのである。

まとめるなら、ここで争点となっているのは、フランスの美的感覚か技術力かということになる。王党派と共和派というそれまでの政治的な争いとは違い、パリの新しいモニュメントがフランス全体を代表することは双方に認識されておき、フランスの何を強調すべきかが争点を形成している。ここで重要なのは、塔の建設に対する賛否が、立場は異なりながらも、世界的な視野から検討されているという意味で一致していることである。ここには、一八八九年という時代が議論に与えた影響をはっきりと見て取れる。

普仏戦争に敗北しながらも、植民地獲得においてはイギリスと覇を競い、文明の発信地として世界の中心となった当時のフランスでは、パリの景観は世界的な評価を基準として議論されたのである。

図三 ルーヴルのガラスのピラミッド (筆者撮影)



四 ガラスのピラミッド計画案⁽⁶⁾

一九三七年以降、パリで万博が開かれることはなかった。第二次大戦、インドシナ戦争、アルジェリア戦争と続いたあいだ、パリの都市計画に目立った展開はない。新たな事業が実施されるようになったのは、現在の第五共和政（一九五八年）になってからである。それは、パリに新しい文化施設を建設するというものであり、大きな裁量権を与えられた第五共和政大統領の主導という特徴を持っている。このため、大統領が自らの足跡を残すためのモニュメントと批判されることも多い。⁽⁷⁾

なかでも、ミッテラン大統領による「グラン・プロジェ」は、この展開をもっとも強く印象付けた。一九八〇年代のパリに一〇もの革新的な建造物を一気に建設したからである。とりわけ、ルーヴル美術館の改築事業（グラン・ルーヴル計画）は、最大の論争を呼び起こした。歴史的建造物の中庭に高さ二〇メートルのガラスのピラミッド（図三）を設置したことがその原因である。パリにはその後も多くの革新的な建造物が建設されたが、ガラスのピラミッドほどの衝撃を持って迎えられたものはない。つまり、

この景観には、現代パリの景観形成の認識的な転換を見ることができるのである。本論では、これを検討していきたい。

まずはプロジェクトの経緯を見ることにしたい。一九八一年九月、ミッテランは大統領就任最初の記者会見の中で、ルーヴル美術館を改造するという計画を発表した。建物の一部を占めていた財務省を移転し、宮殿全体を美術館として機能させるというのである。財務省がその別称でもあったリヴォリ通りを離れ、パリ東部に移転することはすでに事件であった。とはいえ、当時ルーヴルの収蔵品はスペース不足で管理し切れていなかったため、この提案自体は好意的に受け止められた。

事業の準備を行った行政チームは、一九八三年夏、中国系アメリカ人の建築家I・M・ペイに設計を依頼した。彼によるワシントンのナショナル・ギャラリーの改築が成功を収めたばかりの時期であった。彼は、当時すでに近代主義建築の重鎮であり、建築コンペによって審査員に左右されることを拒否した。そのため、グラン・ルーヴルはコンペを経ず、大統領の特命という形式で委任されることになった。計画より先に建築家が任命されるという異例の決

定であった。

一九八四年一月、ルーヴルの改築案が公開された。ガラスのピラミッド計画についての最初の報道は、『フランス・ソワール』というフランス最大の 대중紙によるものであった(一九八四年一月二四日付)。「新ルーヴルはすでにスキヤングルを起こしている」というセンセーショナルなタイトルとともに、ガラスのピラミッドが発する照明が夜のルーヴルを照らしている様子が描かれている。批判の矢がまず大衆紙によって放たれたことから、一部の専門家やエリート層の間だけではなく、フランス社会全体において議論が展開されたことがうかがえる。『フィガロ』紙は反対のキャンペーンを始め、ルーヴルが管轄内にあるパリ一区の区長も反対の請願書への署名活動を行った。

反響があまりに大きかったためか、最初は政府の関係者も慎重な表現を用いている。ルーヴルの主任学芸員による合意文書(一九八四年二月三日付『ル・モンド』)では、ピラミッドについて、「おそろしく大胆ではあるが、建築計画全体は一貫性や質を全会一致で評価され、受け入れられており、『ピラミッド』それに関与する提案である」とのみ書かれている。つまり、建築計画の整合性を評価し、

受け入れられるとしたものの、ピラミッドそのものの是非には踏み込むことはなかったのである。また、関係者の一人は、賛成を表明しながらも、「この目先の変わった物体の美的観点については、私は建築の図面をうまく読めないで判断を保留する。(…) 工事が取り戻せないものではないことは重要である。極端に言えば、いつでも壊せるのだ」(フランス美術館団体代表、ユベール・ランデ、一九八四年一月二八―二九日付『フィガロ』)と完全に及び腰になっている。

ガラスのピラミッドには、地下空間のヴォリュームや太陽光をとるために必要という建設計画上の意義があった。計画担当者は、ガラスのピラミッド建設後の新景観に対する評価を避け、この機能的な理由による説明を行った。また、ミッテラン大統領は積極的な肯定も否定も公表しないまま、一九八四年二月一三日、発表から約三週間で計画に承認を与えた。ルーヴルのピラミッドは、設置されることを前提にしつつ、計画者たちも含めた論争の中で賛否が争われることとなったのである。

五 景観解釈の参照点

ルーヴルの中庭というきわめてよく知られた場所に見慣れない建造物を建設する計画は、まず衝撃を持って迎えられた。その衝撃を言葉にする仕方、いわば景観の解釈の仕方は、この時点では定まっていなかった。論争への参加者自身が、景観から連想したものを引き合いに出しながら解釈を提案しているのである。それが繰り返されることによって、新景観が連想させるものリストが出来上がってくる。これを解釈の参照点と呼ぶことにしたい。

ピラミッド論争は、新聞、雑誌などのメディアを介して行われた。そこには、美術や建築の専門家だけではなく、広範な人々の意見が寄せられた。議論はきわめて多岐にわたっている。にもかかわらず、解釈の参照点は、時代や社会状況を反映してある傾向を持っている。ここでは賛成する立場と反対する立場によるいくつかの特徴的な発言から、この傾向を捉えることにしたい。

まず、新景観の形状から、エジプトのピラミッドが想起され、それにまつわるさまざまなイメージが提示された。エッフェル塔を正当化するためにその提案者が言及したの

図四 マドレーヌ寺院(筆者撮影)



とは異なり、今回のそれは主に否定的な見解であった。「ファラオの墓場」であるというのはその代表的な例である。

これには、賛成する立場によってさまざまな反論がなされた。なかでも、ピラミッドはすでにフランスに存在したのだという議論が複数現れている。たとえば一九八五年一月三十一日付けの『フィガロ』には「パリには既に十六世紀と十七世紀にピラミッドの計画が存在した。はじめのは右岸のボン・ヌフの軸上であり、二番目はシャンゼリゼの庭園のパスベクティブ上であった」という意見が掲載されている。新ルーヴルの景観はエジプトを想起させるものとして批判され、賛成派はこれをフランス起源のものとする主張したのである。

また、反対派はその形状のみを批判したのではなかった。たとえば、まるで「マドレーヌ教会の階段にミッキーの銅像」(一九八四年二月八日付『フィガロ』投書)を置くようなものだという発言があった。マドレーヌ寺院(図四)とルーヴル、ガラスのピラミッドとミッキーマウスは景観としては似ているわけではない。しかし、マドレーヌ寺院は、パリを代表する歴史的モニュメントである。この表現

の中では、アメリカの建築家はルーヴルというモニュメントにミッキーマウスにも比しうる不釣り合いなものを持ってきたという連想が働いている。

賛成派の議論にも、必ずしもピラミッドの形状とは関係しないものがあった。たとえば、コンコルド広場のオペリスク、あるいはヴァンドーム広場の柱と比べれば、ガラスのピラミッドを批判するには当たらないという意見が示された(一九八四年三月一二日付『ル・モンド』)。オペリスクやヴァンドームの記念柱は、やはりガラスのピラミッドとまったく似ていない。ここでは、設置当時は奇妙でもパリを代表する景観となりうる例として示されているのである。

ルーヴルや新景観とは直接関わらないこれらの連想は何に由来するのだろうか。よくみていくと、賛成派・反対派双方が引き合いに出している建造物や景観は、いつもパリあるいは少なくともフランス国内のどこかである。新景観を解釈するために、都市レベル、あるいは国レベルにおいて既存景観の参照を行っているのである。

これらから、ピラミッド論争においては、ガラスのピラミッドをフランスの文化からいかに捉えうるかが問われて

いたことを見て取れる。新景観に賛同するにせよ、反発するにせよ、その議論の正当化にはフランスの既存景観や歴史的経験の引用が必要不可欠だったのである。

さらに、論争においては、景観自体ではなく、景観成立過程を問題としている議論も少なくなかった。ひとつは、建築家I・M・ペイがフランス人ではなかったことである。フランスの重要な歴史的モニュメントであるルーヴルに外国人建築家が携わってよいものかどうか。そこに想起されたのが、「ルイ十四世の時代のベルニーニ」であった。

ルーヴルの一角に、ペローの列柱と呼ばれている部分がある。ルーヴルは、原型が造られた十二世紀から数えれば、八世紀の期間を通じて増改築を繰り返してきた建造物である。この部分はルイ十四世の時代に造られた。ルイ十四世は当初、ローマで活躍していた芸術家のベルニーニに設計を依頼した。しかし最終的には、彼の案ではなく、フランス人建築家のペローの案を取り、現在の姿となった。ルイ十四世がなぜベルニーニの案を採用しなかったかについては諸説ある。しかし、フランスで、イタリア・バロックよりも古典主義的な建築様式が好まれた事例として非常に有名である。そしてそれ以前も、それ以降も、ルーヴルに携

わった建築家はすべてフランス人であった。

ここから反対派は、世界的な建築家であっても外国人がルーヴルに携わることではできないという議論を展開した。ベルニーニの案が採用されなかったのは、イタリア・パロツクの導入を「ルイ十四世が危険だと考えた」(一九八四年一月二八―二九日付『フィガロ』)からだといわれている。他方賛成派は、ベルニーニがルイ十四世によってバリーに「招聘された」ことを強調した(一九八五年四月二二―二三日付『ル・モンド』投書)。ベルニーニの案が採用されなかったのは、フランス人建築家が反対したためであり、つまりは世界的な芸術を理解しない者のナシヨナリスティックな狭量さのためであったとしたのである。

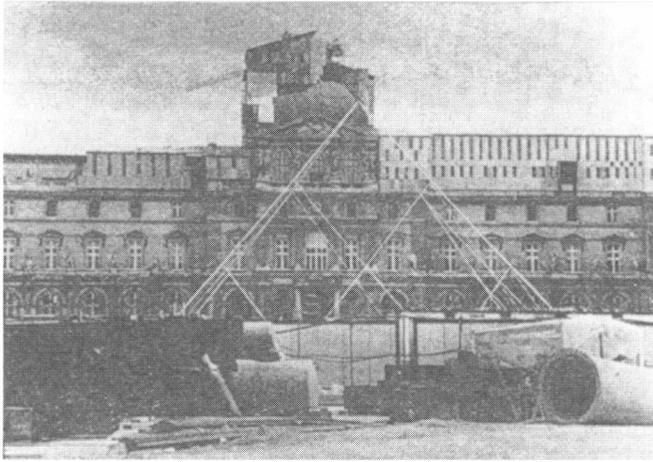
賛成派と反対派は、同じ歴史的事実から逆の結論を導き出した。どちらが「正しい」かはここでは問題ではない。ルーヴルに中国系アメリカ人であるペイが関わることを正当とするにせよ不当とするにせよ、その主張の根拠としてベルニーニとルイ十四世の事例が現れたことが重要である。それは、現在の景観形成過程の妥当性が歴史的事実によって保証されることを意味する。ルイ十四世は賛成派にとっても反対派にとっても自らの見解を代弁する存在となっ

いる。

ピラミッド建設に歴史的な経験を導入する主張は、そのほかにも現れた。一つは、実物大模型の展示に関するものである。一九八五年五月、現在ガラスのピラミッドがある場所に、クレインでケーブルを張った模型が展示された(図五)。反対派は、計画発表当初から、凱旋門やオベリスクの建造に際して設置された模型を前例として、ピラミッドの模型展示を要求していた⁽⁸⁾。その際、バスティーユ広場のゾウなど、模型展示の後、実現しなかった計画も言及された。模型が市民に受け入れられなかったのが実現を阻んだ理由であるとしたのである。反対派のねらいは、模型の展示によってピラミッド反対の世論を盛り上げようというものであった。実際にはその思惑は外れ、模型展示の後、論争はむしろ沈静化した。

さらには、論争が起きていること自体についても、歴史的事実が引用された。エッフェル塔をはじめ、ポンピドゥーセンター、レ・アル再開発など、パリにおいて議論の後に実現したプロジェクトが提示された。こういった状況を当時のジャック・ラング文化大臣は次のようにまとめた。「建築の革新すべてに反対するというのは、フランス

図五 ピラミッド実物大模型 (一九八五年五月二日付『リベラシオン』)



の古きよき伝統に属するもので、あえて言うならば、我々の国民的なフォークロアに属するものである」(一九八五年三月二四日―二五日付『ル・モンド』)。ガラスのピラミッドが批判されていることは問題ではない。激しい反発は、まさに革新的なものへの反応としてフランスの伝統にのっとっているとしたのである。

ラングの発言は、この景観の成立過程全体を見通したときに非常に象徴的である。外国人建築家の採用、実物大模型の設置、論争といった経緯どれをとっても、それを現在どう評価しうるかではなく、フランスの歴史的経験から解積が与えられたのである。

以上に見てきたように、新たな景観および景観成立過程を解釈するにあたって、参照されたのは常にパリおよびフランスの文化であった。外国人建築家によって一九八〇年代に設計されたガラスのピラミッドは、論争を通じてフランスの歴史の中に多くの参照点を持つことになったのである。ここから、フランス文化への位置づけが現代のパリにおける景観形成の特質を表しているといえる。

六 おわりに

近代フランスは、パリを主要な舞台として国家形成を行った。見てきたように、現在のパリの景観は、絶対王政期の権力誇示、革命後の王党派と共和派の対立、世界の覇者としての対外的アピールといった歴史的段階を経て形作られた。それぞれのモニュメントは、建設された時代のみならず、正当性を得てきたのである。

現代のパリにはフランス社会の何が投影されているのかをもう一度考えてみたい。大統領のミッテランは、グラン・プロジェクトによって新しい建築を提示することが、フランスの存在感をアピールすることにつながると考えていた。⁽⁹⁾しかし、一九八〇年代のフランスは、もはやその建築がただ世界の先端であるだけでは受け容れられなくなっている。論争は、新たな景観を先端であると同時に伝統的という癒着した形に置き換えたのである。

もちろん、この論争は、ルーヴルという誰もが想起する歴史的建造物の景観であるがゆえに広がりを持った。しかしその広がりには、はからずも現代フランスが景観に世界的な価値よりフランスの特殊性を求めている状況を明らかに

にしたのである。二〇〇三年の調査によれば、フランス人が考えるフランスの切り札は、一位が「歴史、歴史遺産」(五一%、複数回答)であり、「文化的・芸術的・知的影響力」は五位(三二%、同)である。⁽¹⁰⁾ エッフェル塔とピラミッドという景観は、後者から前者への意識の変化を反映している。この意味において、ガラスのピラミッドは、まさに現代フランスを象徴する景観となっている。

重要なのは、このような認識の変化が、パリという都市を一体としてつくりあげている特徴、すなわち、フランスの首都としての性質と矛盾しないことである。パリの景観は、王国の首都から植民地帝国崩壊後の共和国の首都にいたるまで、都市としての位置づけの変遷の中で形成されてきた。それぞれの時代の論争は、パリの果たすべき役割が変化したことを表出させ、また都市の特性に関する新たな認識を社会に提示したのである。都市景観は、それに対する認識を通じて社会の現状を映し出しているのである。

(1) 日本語の「景観」はドイツ語からの翻訳語であり、当初は学術用語として使用されていた。「景観」と「風景」の違いは、ヨーロッパ言語にはない。「風景」が中国起源の古い言葉であるのに対し、「景観」はドイツ語の Land-

schaffの訳語として二十世紀初頭に作られた(岡田二〇〇一年)。ここから明らかなように、歴史的により複雑さを含んでいるのは「風景」であり、最近の研究でも、「風景」のほうに注目が集まっている。特に、美あるいは故郷という観念と結びつきやすいことから、千田稔、荒山正彦などによってイデオロギー性の研究が進んでいる(千田一九九八年、荒山一九九八年)。他方、「風景」と「景観」の語を使い分けながら議論を展開している論者も多い(樋口一九八一年、鳥越一九九九年、大室二〇〇二年)。共通しているのは、「景観」は「風景」より実践的な語、あるいは客観性の高い学術用語としていることである。そこで「景観」をキーワードとする研究は、より実践的な研究者が中心となっている。たとえば、都市工学の樋口忠彦(一九八一年)は、日本の景観の「型」を古典文学や水墨画から導き出し、都市計画にその「型」を活かすことを提案している。また社会学者の鳥越皓之をはじめとするグループ(一九九九年)は、景観から人々の暮らしを描き出すことにより、コミュニティを支える基盤について考察している。とはいえ、風景と景観にそれ以上厳密な概念定義は今のところない。この二つの用語による研究をどのように整理すべきかについては、今後包括的な研究史のために必要となってくるだろう。

(2) 現在は、七月一四日の軍事パレードの最終地点になるなど、権力や軍事を表す場となっている。

(3) 都市の整備ということでは第二帝政のオースマンのبارリ改造が有名であるが、この時代は逆にモニュメントをあまり残さなかった。唯一ともいえるモニュメントがオペラ座であるが、文脈が異なるためここでは割愛した。第三共和政は、基本的には第二帝政のオースマンの都市改造を引き継いで、交通循環と衛生状態の改善を企図し、古い街区を壊して道路を通し、新しい住宅を提供する計画を進めた。本文でも述べたように、特筆すべきは都市保存のための法律制度が整備されはじめたことである。一九一三年には歴史的モニュメント保存のための法律が公布された。

(4) 「芸術家たちの請願書」と呼ばれることもある。ここでは、オルセー美術館で一九八九年に開催された美術展の図録より再掲・訳出した。またエッフェルの反論は、Marey (1984) より再掲・訳出した。

(5) 建設以降にエッフェル塔がどのように読まれたかについてはまた別の問題である。ロワレットは、完成以降の解積のなかで塔が共和主義を担うものとされたことを論じている(1992)。

(6) グラン・ルーヴル、ピラミッド論争に関する先行研究については、荒又(二〇〇三年)参照。

(7) ポンピドゥー大統領領はポンピドゥーセンター、ジスカール・デスタン大統領領はオルセー美術館、シラク現大統領領はケブランリー美術館の設置に関与している (Mollard 1999; Poisson 2002)。

(8) 建設に反対していたルーヴル再生協会の公式発表はその例の一つである。(一九八五年一月一九二〇日付『フィガロ』等に掲載。)

(9) 『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌一九八四年二月一四日号インタビューより

(10) 調査結果の一位から六位は次の通り。「歴史・歴史遺産」(五一%)「社会保全のモデル」(四八%)「生活環境の質」(三六%)「技術・調査の分野における潜在能力」(三三%)「文化的・芸術的・知的影響力」(三二%)「公的サービス」(二二%) (二〇〇三年一月一三—一四日付『ユマニテ・エポド』)。

引用文献

- Agulhon, M. 1992. Paris: La traversée d'est en ouest. Nora, P(ed). *Lieux de Mémoire III. Les France*. Gallimard. Paris pp.869-909
- 荒又美陽二〇〇三年 「ルーヴルのピラミッド論争に見る現代フランスの景観理念」『地理学評論』第七六巻第六号 pp.

435-449

荒山正彦・大城直樹・遠城明雄・渋谷鎮明・中島弘一・丹羽弘一 一九九八年 『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院

Berque, A. 1986. *Le Sauvage et l'Artifice: Les Japonais devant la Nature*. Editions Gallimard. Paris (＝篠田勝英訳一九八八年『風土の日本—自然と文化の通態』筑摩書房)

Berque, A. 一九九〇年 (篠田勝英訳) 『日本の風景・西欧の景観—そして造景の時代』講談社

Cosgrove, D. E. 1984. *Social Formation and Symbolic Landscape*. Croom Helm. London & Sydney

Cullen, G. 1971. (first published 1961) *Townscape*. Architectural Press. London (＝北原理雄訳一九七五年『都市の景観』鹿島出版会)

Harvey, D. 1979. Monument and myth. *Annals of the Association of American Geographers*. 69-3. pp.362-381 (＝佐藤じゅみ・太田雅子訳一九八一年『モニュメントと神話』千田稔訳・編『地図のかなたに—論集 景観の思想』地人書房)

樋口忠彦一九七五年 『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間』技報堂

樋口忠彦一九八一年『日本の景観』春秋社

Loyrette, H. 1992. La Tour Eiffel. Nora, P(ed). *Lieux de*

Mémoire III. Les France. Gallimard, Paris. pp.475-503

Marrey, B. 1984. *La Vie & L'Œuvre Extraordinaires de Mon-*

sieur Gustave Eiffel Ingénieur qui Construisit la Statue

de la Liberté, le Viaduc de Garabir, l'Observatoire de

Nice, la Gare de Budapest, les Écluses de Panama, la

Tour Eiffel, etc.... Graphie, Paris

松浦寿輝一九九五年『エッフェル塔試論』筑摩書房

Mollard, C. 1999. *Le 5 e Pouvoir. La Culture et l'Etat de*

Malraux à Lang. Armand Colin, Paris

Musée d'Orsey. 1989. *La tour Eiffel et l'exposition univer-*

selle. exposition du 16 mai au 15 aout 1989. Réunion

des musées nationaux. Paris

岡田俊裕二〇〇一年「景観」論争』『地理』二〇〇一年四月

四七—五三頁

大室幹雄二〇〇二年『月瀬幻影—近代日本風景批評史』中央

公論新社

Poisson, G. 2002. *Les Grands Travaux des Présidents de la*

Ve République. Parigramme, Paris

千田稔一九九八年「景観と風景」千田稔編『風景の文化誌—

都市・田舎・文学—』古今書院—一四頁

杉本淑彦二〇〇二年『ナポレオン伝説とパリ—記憶史への挑
戦』山川出版社

鳥越皓之編一九九九年『景観の創造—民俗学からのマプロ
ーチ』昭和堂

France Soir

Le Figaro

Le Monde

Le Nouvel observateur

L'Humanité Hebdo

Libération

〔二〇〇四年二月二〇日投稿
二〇〇四年四月三日レフエリイの審査
をへて掲載決定〕

(日本学術振興会特別研究員・一橋大学大学院博士課程)